

# بسم الله الرحمن الرحيم



**HOSSAM MAGHRABY**



# شبكة المعلومات الجامعية التوثيق الالكتروني والميكرو فيلم



**HOSSAM MAGHRABY**



# جامعة عين شمس

## التوثيق الإلكتروني والميكروفيلم

### قسم

نقسم بالله العظيم أن المادة التي تم توثيقها وتسجيلها  
على هذه الأقراص المدمجة قد أعدت دون أية تغيرات



## يجب أن

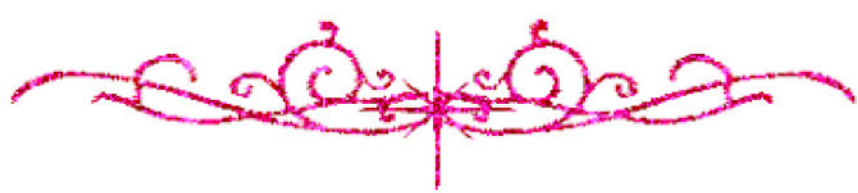
تحفظ هذه الأقراص المدمجة بعيدا عن الغبار



**HOSSAM MAGHRABY**



# بعض الوثائق الأصلية تالفة



**HOSSAM MAGHRABY**





بالرسالة صفحات

لم ترد بالأصل



HOSSAM MAGHRABY



アインシャムス大学

日本語・日本文学科

博士前期課程（修士課程）

قسم اللغة اليابانية و أدائها

エジプトと日本の演劇における「第三言語」

タワフィーク アルハキーム『取引』と別役実の『移動』を中心

اللغة الوسطى في المسرح المصري والياباني

دراسة مقارنة بين مسرحيتي الصفة لتوفيق الحكيم وايدو لبيتسياكو مينورو

マナール・ムスタファ・ラーディ

指導教授

アテーフ・バハジャト

アーデル・アミン・サーレ

概要	4-7
はじめに	7
専門用語	8
1-中間言語とは	8
2-国語という思想	8
3-中間言語の仮説	8
4-国語改革	9
5-言文一致運動	9
6-ダイグロシア	10
7-多元変種併用	10
8-標準語	10
研究の背景と選んだ理由	11
本研究の目的	12
本研究の仮説	12
本研究の範囲	12
本研究の問題点	13
先行研究	14
研究方法	15
本研究の重要性と研究意義	16
第一章：日本とエジプトにおける 19 世紀のダイグ	17

ロシア的な言語状況	
<b>1-1</b> 日本における多元変種併用問題	<b>17</b>
<b>1-2</b> エジプトにおけるダイグロシア的な状況	<b>22</b>
第二章：日本とエジプトにおける言語改革	<b>26</b>
<b>2-1</b> 日本における言文一致運動	<b>26</b>
<b>2-2</b> エジプトにおける「アラビア語の国語化」イデオロギーAltamsir	<b>32</b>
第三章：日本とエジプトにおける標準語の実験『移動』と『取引』を実例に	<b>38</b>
<b>3-1</b> 別役実の『移動』における標準語の実例	<b>41</b>
<b>3-2</b> タワフィーク アルハキーム『取引』におけるの第三言語の実例	<b>44</b>
<b>3-3</b> 第三言語の分析	<b>45</b>
結び：	<b>59</b>
参考文献	<b>63</b>



## 概要

日本とエジプトは長い歴史と古代文明を持つ二つの国である。本研究では日本における言語改革と近代化運動、「中間言語」とエジプトにおけるそれらを比較し、いまだに多く存在するフスハーとアミーヤの問題解消を問題意識としている。

日本とエジプトの二人の演劇作家はその文学作品において「第三語」を使用することを選んだ。エジプト人のタワフィーク アルハキームは、1956 年に出版された「取引」で用いたアラビア語の第三言語（中間言語）のアイデアの創始者として知られている。一方、日本では、別役実の「移動」という演劇は、日本での「言文一致」のモデルであった。二つの演劇で、日本語とアラビア語の間の第三言語の適用についての比較を行う。

この研究は、社会言語学に属するため、まず社会言語の概念を導入し、それから、エジプトと日本における、中間言語に関連する用語の大部分と「国字改革運動」を定義し、ダイグロシ的な言語状況も「言文一致」の成功の程度や日本とエジプトにおける標準語の試みについて明確にする。

2005 年で、中井精一は、「社会言語は、社会とことばの相関関係に焦点を当てた学際的な研究分野です。」<sup>(1)</sup>と述べている。つまり、社会との関係で言語を研究し、その社会的および文化的機能に関連

---

<sup>(1)</sup> 中井 精一『社会言語学のしくみ』2005 年 12 月 20 日、株式会社 研究社、p002

する言語構造および使用方法のすべての側面を規制する科学である。以前、日本の伝統的な研究は日本の歴史に重点を置く傾向にあり、言語学や日本の研究の方法では、現実世界で使用される日本語の外観を把握することについて十分とは言えなかった。しかし、近年、社会言語学の学問分野は日本でより深く研究されており、当時の人間が使用している言葉とその特徴がどのように現れるか。例えば、教育現場では、日本語教育や外国語教育など、文化や社会から言葉が分離されていない。

私は社会言語学が日本で構築されるべきだと考えており、その言語は社会や文化と密接に関係していて、「言語」と「文化」は人間存在の根幹にあり、両者は深く関連しており、多くの研究においてその関連性に重点を置く傾向が強まっている。一方、アラビア語には本質的に一つの言語であり、時間が経つと周囲の環境の影響はいくつかの方言に分岐し、それぞれの方言は他の方言とは独立している。一つの方言にはフスハーとアミーヤという二種類の話し方がある。

フスハーは、メディアや政治の分野などで使われている言語で、アミーヤは生活の中で私たちの提示されるものについて毎日話す言葉である。フスハーとアミーヤの間の距離を縮めるため、中間言語（第三言語）について考えなければならない。エジプトには、バダウィと呼ばれる有名な社会科学専門家でおり、彼はフスハーとアミーヤの明確な区分を前提とした分析を全面的に創案した。

その研究は、20 世紀の後半からエジプトで五つの言語レベルの存在を認識している。

第一、遺産的フスハー(何にも影響されない伝統的な科学的であり、アズハルの学者の聖職者にはほぼ立っている)。

第二、近代フスハー(現代文明の影響を受けて、フスハーで使われている言語)

第三、教養人のアミーヤ(現代文学とフスハーの両方によって影響を受ける共通言語である。通常や抽象的な問題や文化主義者の教養人間の議論で使われるだから、このレベルの言語を使用されている)。

第四、識字者のアミーヤ(現代文明の影響を受けて、そして、識字者は、日常生活の一般的な問題で、購買、売買、ニュースを伝えることで使われている)。

第五、文盲のアミーヤ(フスハーや現代文明の何にも影響されない一般性、このようなレベルは、所有者の非識字に関連している)。

エジプトでは、複数の言語レベルが存在する結果として、書かれた言語と話し言語との間の問題のせいで「ダイグロシア」現象を現れている。「ダイグロシア」現象については第一章で具体的に説明する。

そして、この時代には、テクノロジーの開発やインターネットの使用などアラビア語に大きな影響を与える他の要因もある。



インターネットの悪用のせいで、**Franco-Arab** として知られる書き込み方法が出現している。その書き方は、アラビア語を外国語で書くことを意味することを書くことの方法であり、今、この言語は社会コミュニケーションの手段としてもっとも使われている。時間が経つにつれて言語の悪化や崩壊、そして社会の階級間の距離が広がっている。

そのため、日本の経験のように、アラビア語に打撃を与える大きなギャップを制御することに成功したように「言文一致」をしようとする必要があると思う。

## はじめに

日本では、近代化を迎えようとしていた明治時代において、統一言語の存在がなく、その時代に相応しい言語が存在していないことが問題視されていた。その問題を解決し日本の近代化という目的を達成するために、言語を改良しようとしたのが「国語字改良運動」である。

一方のエジプトでは、正則アラビア語が使用されていたが、外来語や方言をアラブ人が使うようになってきた 20 世紀初頭からようやく、アラビア語の文法規則が改変され、研究者たちによりアミーヤの語彙研究が始まった。つまり、20 世紀後半から、近代エジプトの国語史を形成し始めた。残念なことに、テレビ、ジャーナリズムなどの様々なメディアは、言語の進化に貢献するのと同時に、混乱を招くこともある。

## 専門用語

### 1-「中間言語」とは

おもに書き言葉として使用される伝統的言語である文語と民衆の日常生活でもっぱら話し言葉として用いられる口語との中間に創案される言語のことである。

### 2-国語という思想

「国語は概念として、いつ、どのようにして形成されきたのか、明治日本が国民国家として自己形成し植民地帝国へと空き進なか、国家統合を支える不可欠の役割を担うべく創出された「国語」とそれをめぐってせめぎ合うイデオロギーの展開を、上田方年・保科孝一ら言語思想を軸に克明に描きだす「国語」の思想をあばく画期的力作」。<sup>(1)</sup>

### 3-「中間言語」の仮説

「中間言語」は、国民国家を成立させた近代フランス語、ドイツ語などの西欧を始めとした世界の多くの地域で起こった言語を基礎として確立した“national language”とは異なりアラビア語圏、日本、トルコなどの言語近代化に現れた言語状況の中に見出せるものを指す。日本の文語は正則アラビア語「フスハー」に、話しことばは俗語（大衆語）を意味する「アミーヤ」に相当する言語変種と考えるこ

---

<sup>(1)</sup> 真田信治 庄司博史『日本の多言語社会』2005年10月25日、株式会社岩波書店、p 387

とが可能である。ここでは、エジプトの「アミーヤ推進運動」を日本における「言文一致運動」に当たる言語改革と位置づける。

#### 4-国語改革

日本における国語改革の目的は、明治維新と関連して発生したという指摘には同意できる。しかし、漢字廃止論が「教育の民衆化」「個人の解放」を目的としていたという見方は表面的すぎる。

一方、エジプトは、危機的な言語状況にある、それは、正則アラビア語たるフスハーという1つの言語変種によって読み、書き、教育を身に着ける。一方で、話し言葉としてアミーヤという別の言語変種で日常生活を行なっており、またそれとは別の変種もマスメディアの言語として存在してい。

る<sup>(1)</sup>。その問題のせいで、「階層的コミュニティ」が形成され、国語改革の目的は一つだけの言語を使うことになった。

#### 5-言文一致運動

日本における「言文一致運動」は国民国家の成立および国力増強の条件であると認識された。その「言語観念」を背景とした近代日本の言語改革の出発点と考えられる。

一方、エジプトにとっての「言文一致運動」は、フスハーの文法通りとアミーヤにそれぞれ書き直して、一つのアラビア語の正式な言語になる。

---

<sup>(1)</sup> アーデル・アミン『エジプトの言語ナショナリズムと国語認識』、1999年2月26日、株式会社三元社、p11



## 6-ダイグロシア

「ダイグロシア」という用語は、ある言語社会において、単一言語内の二つの変種( **varity** ) が、「高位の変種」他方「低位の変種」という二つを区別して使い分ける場合をさす。それぞれ一定の社会的機能を持ち、60 年代以降、社会言語学においてダイグロシアという研究領域は、最も重要な地位を占めるようになった。<sup>(1)</sup>

## 7-多元変種併用

日本社会に見られる言語内の多元変種併用は、文化の統一性を媒介できる「標準語」の不在を意味する。この問題について具体的な説を結語で取り上げる。

エジプトの言語においては、「フスハー」、「アミーヤ」、「中間言語」のいずれも、同じ言語社会に複数の変種が組織的に分化し、それぞれの変種が固有の機能を持っていることを主張している。このような言語状況を、「言語内の多元変種併用」と呼び、エジプト社会を対象にして論ずることにする。

## 8- 標準語

標準語という用語が一般化したのは 20 世紀初頭である。外国に対して日本国の言葉という捉え方もあるが、当時、国民国家として国を統一するための象徴として計画されたものの一つが標準語であった。そして、国語教育の中で、それを教える段階で、標準語は良いもの、一方の生活語としての方言は悪いもの、といった形での指導

---

<sup>(1)</sup> Hudson ‘Diglossia :A bibliographic review ‘ Language in Society ‘ 21.611-674、1992